
KAMEN RIDER GANBARIDE-CLIMAX HEROES-

ログ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

KAMEN RIDER GANBARIDE -CLIMAX
HEROES -

【Zコード】

N 8 5 4 4 X

【作者名】

ログ

【あらすじ】

謎のガンバライドカードを手にした少年、門司仁。そのカードに描かれているのは、知らないライダーだった。カードに導かれるかのように、ガンバライドに吸い込まれ、目にしたものは壮絶なライダーバトルだった・・・。

ベルトキタ - - - - - (前書き)

これは新たなる仮面ライダーの戦いである。

× 137319 — 4660 ×

ベルトキタ - - - !

俺は、ゲームセンターをぶらついていく。
目の前にはガンバラайдがある。

前から、興味あつたんだ。

でも恥ずかしくてできなかつたんだ。

一回ぐらいなら、恥ずかしくもないよね。

チャリン。

百円玉を入れる。

すると、カードが出てきた。

これが、ガンバラайдカードか。

ピンク色の淵のディケイドが使用するものに少し似ているカード。
そこに描かれているのは、知らないライダーだった。

「仮面ライダー ガンバラайд」??

そんなライダー知らないなあ・・・。

俺は、そのカードしか持つていなかったため、それをスキャンした。
すると・・・。

俺の体がガンバラайдの筐体に吸い込まれていった。
嘘だろおおおおおおお?

あれ・・・ここは・・・?

俺は、夜の廃墟に倒れていた。

すると、誰かがやつてきた。

？？？？？？「お前、ただの人間だなあああ？」

目の前には、地獄兄弟と、紫目のオーズがいた。

（アーヴィング）心儀されまいが。

10

ナシワエノマツ、瀬ミノ。

ノリハシノミコト

「……」

あー、大体分かつた。

才力の世界みたいに感じなくなれば

キックH「お前に地獄を見せてやる。」

卷之三

不二がこの本は向かって図りががてきが

ああ・・・、俺もうだめだ。

さよなら
え？

二九

俺の目の前に、一人のライダーが立ちはだかる。

？？？？？ - 大丈夫か？』

卷之三

そこには、ディケイドとフォーゼがいた。

「ディケイド」「俺は、仮面ライダー・ディケイド。覚えとけ!」

フォーゼ「俺は、仮面ライダーフォーゼ！！ガンバライド、キタ！」

！」

なんだ？ここは？

ライダーが目の前にいる？

夢のようだ！

フォーゼ「おい、アンタ。名前は？」

俺
？俺は、門司仁かどつかじん。

フォーゼ「仁か！気に入った！これやるぜ！」

フォーゼは、俺にフォーゼドライバーのような、アクセルドライバー

ーのようなものを渡した。

赤い起動用のスイッチがない。

その代わり、ベルトの真ん中に、メモリスロットがある。

俺は、さつき手に入れたカードを相手に見せた。

仁「見る！俺も仮面ライダーだ！」

ベルトを腰に巻きつけた。

すると、カードはガイアメモリへと変わった。

「G」と書かれたガイアメモリだ。

仁「変身！」

「ガンバライド」

俺は、メモリを鳴らし、スロットに差し込む。

「3 . . 2 . . 1！」

そして、グリップを前に動かす。

「ガンバライド！！ ガ・ン・バ！ガンバ！！」

再び、メモリ名を挙げ、いつかのガンバライドのCMの音声が流れ
る。

俺は、仮面ライダーガンバライドになった。

ガンバライド「俺は、ガンバライドとして戦う！！終わりがくるま

で！！

ディケイド「俺は通りすがりの仮面ライダーだ！覚えとけ！」

フォーゼ「宇宙キタ

！」

ガンバライド「勝負だ！」

オーズ「ウガアアアアアアア！」

オーズは俺に襲い掛かってきた。

ガンバライド「はあつ！！」

パンチH「そらあ！」

フォーゼ「これならどうだ！」

「ロケット・オン」

フォーゼ「ロケットパンチ！！」

パンチH「ぐわああああああああ！」

パンチHは一発でノックアウトされた。

キックH「ライダー・キック！！」

「ファイナルアタックライド」ディディディディケイド

ディケイド「はあ――――――！」

キックH「があああああああ！」

ガンバライド「どうすりやいいんだあ・・・？」

オーズ「ぐわあああああ！」

オーズはトランクローで、攻撃してくる。

ガンバライド「そりやあ！」

そうだ。スイッチがある！

俺は、一番右のスイッチを押してみた。

「マシンガン・オン」

俺の手に、マシンガンが取り付いた。

ズババババババババババババツ！

オーブ「ガアアアアツ！！！」

ガンバライド「今日はこれで負けてしまいか！」

「マシンガン・ギレツアタッケ」

ケリッフを再び前に動かしてみた

オーズ「ぐわああああああああああああああ！」

オーズと地獄兄弟は、カードになつてひらひらと中を舞つていた。

ガンバライド「俺達は、何をすればいいんだ？」

「ディケイド」「この世界は、ガンバライドの世界だ。」

「ガンバライド」「ガンバライドの世界？」

「ディケイド」「そう、ここはガンバライドの世界だ。平行世界論は知つてるか？それぞれ独立して世界があるつていう。その世界の中の一つ、それがガンバライドの世界だ。お前の世界にあるようなガンバライドの筐体につながっているんだ。」^{〔ワールドのよう〕}「」

「ガンバライド」「で、この世界では何をするんだ？」

「フォーゼ」「この世界のライダー全員とダチになる！」

「ディケイド」「ちがう！俺達は、ここでバトルロワイヤルさせられている！勝ち残らなければならないんだ！」

「ガンバライド」「へえ、なるほど……。」

不意に爆発が起きた。

そこには、青が主体のライダーが一人いた。

あれは……。

「ディケイド」「ディエンドだと……？」

「ディエンド」「さてと、お宝はどこかな？」

「ガンバライド」「ディエンドか！お前にやる宝はねえ！」

「マシンガン・オン」

「ズババババババババババ！」

「俺は、マシンガンを乱射した。」

「ディエンド」「なかなかやるね！でもこれには勝てないだろ？！」

「カメンライド NEW電王」

「NEW電王」「テディ、カウントダウンだ。6秒でいい。」

「テディ」「OK。……6。」

まずNEW電王が切りかかってきた。

俺はそれを避ける。

5.

その隙を突いて、俺を突く。

4

トマソンがジヤンとした。

アダム・ケーラー著
「アダム・ケーラー」

そして 弾を舌身のへ

二二一 作道口三才

3.

「フルチャージ」

NEW電王は走ってきた

2
o

「ファイナルアタックライド デイデイデイデイエンド」
ディエンドは俺達にターゲットを向けてきた。

1.
o

EEW電王は俺を斬った後、ティマンシ=シードの渦巻き込まれ、俺達はその攻撃を受ける。

0.

「タイムアップ！」

ガンバライド「ぐ・・・ぐはあああ・・・。」

「まだ実体を持つてるなんて、しぶといね。まさか、特殊な存在かもね。でも、このカードのライダー達はもうつよ。」
ティエンドは、カードを五枚、広げて見せる。

そこには、このようにカードが並んでいた。

仮面ライダー・バンチホッパー

仮面ライダーオーズ

仮面ライダー ディケイド

假面ノノタニノノセ

「ディケイドとフォーゼがカード化してしまっていたのだ。」

「ティエンダ「じゅあ、また会おう。」

アタックライド インビジブル

俺は仲間がいなくなつたことで悲しみにあふれてしまつた頃だ。

すると、田の前には世界の端がつながっていた。

そして 僕に志が出した

そこなら、強くなれるかもしれない。
俺は、そこに向かつて飛び込んだ。

無のエリア／ディケイドのガセ

そこは、真っ暗な闇だった。

仁「で・・・ディケイドの話だと、ここはバトルロワイヤルで、一人になるまで戦い続け・・・・・つて俺はなんて世界に来てしまったんだよおおおおおおお！」

一人、嘆く俺。

？？「少年よ、慌てるな。」

仁「？？？誰？？」

そこには、桜井侑斗のような服装をした、一人の男性が立っていた。あれは、鳴滝さん？

鳴滝「よく分かつたな。君の仮面ライダー好きは良く知ってるよ。自称・預言者の鳴滝さんがなぜここに？」

鳴滝「自称ではないが・・・、バトルロワイヤルなんてディケイドの嘘だ。」

仁「なんでわかるんですか？」

鳴滝「この世界は、無数のエリアに分かれている…」

仁「エリア？」

鳴滝「君の知っているライダーの世界を再現したようなエリアもあれば、古き伝統を受け継いで暮らす民族が持つエリアもある。また、恐竜が未だにいるエリアがあれば、一日中戦争しているエリアもある。そう、ここは無数のエリアで成り立っているのだよ。」

仁「で、ここはどんなエリア？」

鳴滝「無のエリアさ。」

無のエリア・・・？」

一瞬、鳴滝の言葉に、耳を疑つた。

仁「無・・・ですか？何もなつて事ですか？」

鳴滝「そうさ、他のエリアは、「ズミックエナジーがあるが、ここにはない。それだけのことだ。」

仁「なるべくでも、何でこいつやって俺達は存在しているのだろうか……。」

鳴滝「言いたいことは分かつて。でも、話がそれてしまつたね。じゃ、この世界について、話してやる。」

この世界は、ガンバラайдの世界だ。

2008年末に、ディケイドが本格的に活動する少し前に誕生した。そして、ディケイドは世界を巡るたびに出ていたが、なぜかもう一人ディケイドが存在した。

それが、この世界でさつき君が出会つたディケイドだよ。

君の知つて、テレビで見るディケイドとは全く違うディケイドだ。そのディケイドは、あるときは廃墟でディエンドと戦い、風都でWたちと戦い、そして平地でたくさんのライダー達と共闘していた。そのディケイドは、多彩な技を習得していった。

10数もの過激な技を繰り出して、ライダーたちと戦つていた。

そのディケイドが倒したライダーは、死ぬことがなかつた。

ディケイドは手加減していよだ。

そして、他のライダーに影響がなく、ある意味平和だつた。

しかし、元々はビル街しかないエリアが廃墟に風都に地下用水路に山寺など、いろいろなエリアが増えていつた。

それが最近、急速に増え、100以上のエリアが誕生したんだ。

鳴滝「それが……このガンバラайдの世界だ。君は、この世界から出られなくなつてしまつた。」

仁「そんな勝手な！出る方法はないのかよ！」

鳴滝「それが……ないことはない……ただ……入手が困難なゾーンメモリを伝説の祭壇に差し込めば、脱出できるそつだがな・

・。
「。

仁「じゃあ、そのゾーンメモリを取つてくるぜーー待つていろよーー鳴滝
！！！」

鳴滝「ちょっと……。」

俺は、再び現れた壁に向かつて歩き出した。

仁「変身！」

「ガンバライド」

俺は、メモリを鳴らし、スロットに差し込む。

「3 . . . 2 . . 1！」

そして、グリップを前に動かす。

「ガンバライドー！ ガ・ン・バ！ ガンバー！」

再び、メモリ名を挙げ、いつかのガンバライドのCMの音声が流れ
る。

俺は、仮面ライダーガンバライドになった。

ガンバライド「行くぜ、行くぜ、行くぜえええええええええ！」

「ニンジャエリア／シノビ・超変身！」

ガンバライド「ここは、なにかな？」
俺は、まるで太秦映画村に来たような気分だった。
だって、ここは江戸時代のような町に立っているんだから……
ガンバライド「なんだ？」
京都か？それともサムライワールドか？」

？？？「惜しいな！」
ニンジャエリア「……って事は、忍者がいっぱいいるのか、忍者が支配しているのか、どっちかだな！」
ガンバライド「お前は誰だ？」
？？？「俺は、仮面ライダーシノビだ！」
ガンバライド「よお！シノビ！」
シノビ「よりしぐー！」

シノビは、この世界を、悪の忍者軍団「くノ一」から世界を守つて
いるそうだ。

くノ一は女性だけで組織されてるそうだ。
ガンバライド「女性相手になぜ負ける？」
シノビ「バカか？そういうのは差別だぞ？でもさ、強いぜ？トリッキーにさ。」
ガンバライド「そつか……じゃ、差別はやめとく……あれの事か？くノ一って。」
シノビ「そうだ！」
くノ一の戦闘員達20人が、俺達を襲ってきた。
戦闘員「アアアアアア！」
「マシンガン・オン！」
俺は、マシンガンスイッチを起動させた。

すると、弾が連射される。

戦闘員「グワアアアア！」

そして、マシンガンスイッチをオフにした後、それを抜き、サーベルスイッチを入れ、起動させた。

サーベルスイッチはマシンガンと同じ 部分に差し込むスイッチなのだ。

「サーベル・オン」

ズバッ！

シユパツ！

戦闘員「アアアアン！」

戦闘員「キヤアアアアアアア！」

「サーベル・ゲキレツアタック」

ガンバラيد「ツルギ・ゲキレツスラッシュユーーー！」

俺は、必殺技を繰り出す。

ズヴァアアアアアアアアツ！

戦闘員「アアアアアアアアツア！」

今回のくノ一、ある意味危険だ。

年齢制限の危険がある。

早いうちに倒してしまおつ。

シノビ「早いうちに倒すか・・・・、さつきの戦い・・・なかなか良かつたよ！お前どなら、やれる！行こうぜー！」

俺達は9 - 1 CASTLEに来ていた。

このネーミングは間違つてないよな。

そして、その前にある池に俺達はもぐつている。

シノビ「静かに行くぞ・・・・・・。

ガンバラيد「ああ・・・・・・。」

「

俺達は、この池のそこにある、排水溝口に入り、そのまま進入。そして、隙を突いてボスを旬殺。

あまりにもシンプルで、不安なサクセンでもある。
頑張らなきや。

俺達は排水溝口にもぐりこんで、何とか中に潜入した

シノヒの力で姿を消し、そろそろと歩いていた。

そして、1分、2分、3分と、時が流れていった……。
ソゾ、「あれ……」
「さつま、一の道通りたまな？」

「あ・・・そ、う、い、え、ば・・・・・。」
ガ、ン、バ、ラ、イ、ド

ガシラード「…?」シノヒセシヤ「…?」

シービ「ちよつと待つて。」

ガンバラideon 「お・・・・おい!」

シノビ「はあああああああつ！シノビ流忍法”壁破り”！」

忍法”壁破り”の力で、何とか、エンドレスからは逃れられた。
しかし・・・・くノ一はどこへ・・・・?

シーラーだよ。

「ガンバテイド」そうか・・・・・

シノビ一行くぞ！」

俺達は、ふすまを開けた。

シノビ「成敗！」

しかし

すると城の前に大きな巨人が現れた。

シノヒ 僕の役目には終わった

ガシバライド「冗談はやわらいで……。」

シノビ「俺の力をお前に託す。それが俺が鳴滝に言われた最後の使

命だ。

カジハテハトモガシハ

今、書籍で見るのを躊躇わんと、それ

٥٦

シノビ 最終忍法 忍押箱 >>シノビスイツチ<<<

シノビ・オン

すると、和風の音楽が流れ、俺の体を銀の光が包んだ。

気がつくと俺は、銀と黒が主体の姿になっていた。

ガジバライド!! これが、お前の刃強化だ!!

ふいに、シノビの声が聞えた。

これが、お前の強化形態の「シノビステイツ」だ！

ガンバライド「ありがとよ！」

この装備は、腕にブレスがしてあるぐらいだ。

まずは・・・「壱」のスイッチを押そう。

「イリュージョン・オン」

俺は、3つに分身した。

ガンバラード「すぐに終わらせてやる！」

俺は、城をぬけ、巨人に向かつてとび蹴りを放つた。
巨人はよろめく。

次は、「弐」のスイッチだ。

「インビジブル・オン」

俺の分身能力がなくなり、そのかわり自分の姿を消した。
後ろに回り込み、連續蹴りを放つ。

巨人はそのままじい蹴りで唸る。

さらに、「参」のスイッチを押す。

すると、今までの効果が消え、手には手裏剣がある状態になった。

俺は、それを投げる。

巨人はまた激しく唸る。

ガンバラード「よしーとどめだ！」

「シノビ・ゲキレツアタック」

俺の後ろから、無数の手裏剣が飛び出し、巨人を貫く。

そして、俺は分身し、さらに姿を消し、飛んで連續蹴りを放つた。

巨人は、跡形もなく消えた。

仁「ふう・・・・さつぱりしたあ・・・・」

そう思つてるとまた、目の前に灰色の壁が現れた。

仁「次は、どんな世界かなあー??」

俺は、ワクワクしながら飛び込んだ。

すると、俺はなぜか、どこかの学校について、さりげなく学生服を着ていた。

仁「なんで、学生服？」

俺は、訳がわからなくなっていた。

周りを見渡すと、空を見上げている一人の青年がいた。
気を落ち着かせるため、俺も空を見ることにした。
その空は、とても青くきれいな、青空だった。

「ンジャニア・シノビ・超変身」（後書き）

シノビ「これで良かつたんだよな。あいつなら救えるはずだよな・・・。
」

シノビは「のポケットでつぶやいた。
誰にも聞こえないよ！」、そつと。

空我の世界／俺、転校！（前書き）

今回から、千藤光さんの小説「仮面ライダー空我」青空の勇者。
青空の伝説」とのコラボ回です。
では、始まります！
気合を入れていけ！
ガンバラアアアアアアアアアイド！

空我の世界／俺、転校！

？「青空が、笑ってる気がするよ・・・。やっぱり空ヶ丘は最高だ！」

空ヶ丘・・・？」だ、それは。

仁「ねえ・・・君、名前何ていつの？あと、こりせビー？」

？「僕は空野輝！あと、こりせは空ヶ丘にある都立空ヶ丘第一高校だよー！」

鳴滝「ガンバラيدがレーダーから消えてしまった・・・。ベルトが破壊されてしまったのか？それとも、まさか・・・。」

鳴滝は、だんだん不安になってきた。

白色のアストロスイッチカバンを持つて。

輝「その制服・・・まさか転校生？」

仁「そり・・・みたいだな！俺は、門司仁！よろしく！」

俺は、別のHリアに来たときに何か起きたのだろ？と思いつのHリアに流されることにした。

輝「でさ、その名前なら、僕と同じ一年だね！」

仁「くえ・・・。」

キーンゴーンカーンゴーン

俺は、先生の指示で所属先のクラスの前まできた。
ここがあ・・・。

先生「門司君へ、入ってきてください〜！」

仁「あ、は〜い！」

俺は、教室に入った。

すると、拍手喝采で迎えられた。

なんか嬉しかった。

そのクラスメート達の中にひとり、輝がいた。

とても嬉しそうだった。

仁「はじめまして、門司仁といいます。特技は短距離走です、この学校のことは、まだまだ良く分からないです、頑張って慣れていきたいと思います。以後、よろしくお願ひします。」俺は、適当に挨拶しておいた。

先生「じゃあ、門司君は、さんの茜さんのとなりね。」

俺の隣の席の子は茜ソラといいうらしい。

ソラ「門司君、よろしく。」

なんか可愛い子だな。

そして、4時間ほど時間は過ぎた。

弁当の時間が過ぎ、5時間目に入らうとしたその時、先生の代わりにはいつてきたのは・・・。

ライオンの姿をした怪人だった。

みんなは、思いつきり笑い出しだが、俺にはわかる。

仁「よお！怪人野郎！早速倒させてもらひぜー！」

俺は、椅子から立ち上がった。

そのときには、怪人はもう、一番前の席の人の首を絞めていた。

「ガンバラيد」

俺は、メモリを鳴らし、スロットに差し込む。

「3 . . 2 . . 1！」

仁「変身！」

そして、グリップを前に動かす。

「ガンバラيد！！ ガ・ン・バ！ ガンバ！！」

再び、メモリ名を挙げ、いつかのガンバラيدのCMの音声が流れる。

俺は、仮面ライダーガンバラيدになった。

ガンバラيد「お前さんよお！ 怪人退治なら俺にまかせな！」

「テープ・オン」

俺は、部分のスイッチを押した。

すると、大きなテープカッターのようなものが足に取り付いた。

ガンバラيد「行くぜっ！」

すると、黄色いテープが怪人のほうへと向かっていく、

そのテープはモジュールから出ているのだ。

そして、怪人に巻きつくと、自然にテープは切れ、モジュールの中に収納された。

俺は、そのスイッチの電源を切り、怪人のほうへ走つていった。そして、その怪人を持ち上げ、窓から外に投げた。

俺は、急いでグリップを動かした。

「ガンバラيد・ゲキレツアタック」

俺は、窓からジャンプした。

すると、ガンバラيدのスロットのようなものが、いくつも現れ、それを突き抜けていく。

そして、気づいた頃には相手にとてつもなく強いキックが決まった。

怪人は大爆発を起こした。

輝「君も仮面ライダーだつたんだね！！」

宏「すごいなああああああ！」

みんなから拍手の嵐が巻き起こる。

それもつかの間、学校中に悲鳴が響き渡った。

それは、外で体育をしている生徒たちも同じだった。

ガンバライド「今行くぜ！」

俺は×部分のスイッチを押す。

「スケボー・オン」

さらに、部分のスイッチを押す。

「バスター・オン」

俺は、スケボーに乗り、大きなバズーカーのようなバスターで攻撃する。

生徒を襲っている怪人たちの一撃で爆発する。

ガンバライド「大丈夫か？」

生徒「は・はい・・・・・。」

俺は、二つのスイッチを切り、部分のスイッチを押す。

「シノビ・オン」

俺は、シノビステイツになつた。

「イリュージョン・オン」

俺は、壱のボタンを押してモジュールを起動させる。

3人に分身した俺は、それぞれの場所で戦うように動いた。

その頃、教室では。

ソラ「きやああああああああああああ！」

輝「変身！」

輝は空我に変身する。

そう、空我こそがこの世界の一人目のライダーなのだ。

宏「ちっくしょおおおお・・・。」

そして、樹木に変身できるはずの宏はベルトの役割をする//オがい
ないため、変身が不可能なのだ。

？？「待たせたな！宏！」

宏「ミオオオオ！」

ミオ「行くぞ！」

ミオはジユモクギアになり宏の腰に巻きついた。

そして左手を上に上げ、右手でバックルのレバーをつかむ。

宏「変身！」

そう叫び、レバーを右から左に動かす。

すると、宏は仮面ライダー樹木へと変身した。

空我「はあ！そりやあ！てやあ！」

樹木「そりやあ！はいい！せいやあああああ！」

空我や樹木は怪人と戦っていた。

すると・・・・・。

どこからか、二人とも、銃で狙撃された。

ディエンド「さてと、お宝はどこかな・・？」

悪魔のスイッチ／返せ！そのカード！

「ディエンド」「空我に樹木……。そしてこの学校にはガンバラيدもいる……。僕のカードを探してはます。」

「カメンライド バース」「カメンライド サイガ」「カメンライド ライオトルーパーズ」「ディエンド」「さてと、お宝はどこかな？」

クウガ「あれは……ディエンド？」
樹木「でも、あのライダー達、こっちに向かつて攻撃していく。」

僕達はその攻撃に見事ぶち当たった。
バース「さあて……お仕事開始！」

「サーチャー・オン」
ガンバラيد「これで、ライダーをサーチするぜえつ！」
俺は、レーダーのようなアイテムを、部分に取り付けて、ライダーと怪人を探していた。
すると、ピンポイントで、体育館に当たった。
ガンバラيد「さてと、行かなくちゃな。」

クウガ「どうしようか……ん？」
さつき、体育の授業で走り高跳びをやつたみたいだ。
その棒を僕は、手にとり、力をこめて。

クウガ「ドラゴンフォオオオム！」

僕はドラゴンフォームになつた！

ドラゴンロッドの一撃が、ライオトルーパーを弾き飛ばしていく。
樹木は”雨”と書かれたゼンマイをバツクルに差し込む。

「レイーフォーム！」

樹木は緑色から水色のボタニへと変化を遂げる。

卷之三

「ウイップ・オン」

俺は、部分にはじめて使うスイッチを入れ、起動させた。すると、ムチのようなものが現れた。

近べて、此を以て攻め：：：：：：：：：：：：：：：：：：

二二二

ガジバライド「ディエンドー、ディケイドとフォーゼのカードを返せ

!

テ・エント・ま・連れれるのも嫌だし・これだけ済すよ

ガジバライド「氣が利くやつじゃねえか……ありがとy……って、

突然、一枚のカードが光出し、世界の壁が出現した。

もせん 僕の意識ではなし

「アタックブレイブ」インビジブル

そして、ディエンドは消えた。

アラバマ州の州都ノ ブルーミントン

クウガは龍を描くよりアーティストのロジックを振り回し、ライオトルー
パーを一掃した。

「レイニー・パワー・チャージ！」

樹木「スプラッシュユストラアアアアアイク！」

樹木はパワーを銃にこめ、巨大なエネルギー砲を発射した。

サイガは、跡形もなく消え去った。

「ガンバラайд」「一気に決める！」

「バスター・ゲキレツアタック」

「ガンバラайд」「ライドチャアアアアジ！」

俺は、部分のバスターを使い、パワーチャージをはじめた。

「ブレストキヤノン セルバースト」

「バース」「派手に行くか！」

「バースも準備をはじめた。

「ガンバラайд」「ラアアアアアアアイジング！ストラアアアイク！」

そして、どこかで聞き覚えのあるようなセリフを発した。

「バース」「ファアアアアアイナル！ウエエエエエブ！」

「バースもどこかで聞き覚えのあるようなセリフを発する。

二つの光弾がぶつかり合い、爆発を起こす。

最後に勝つたのは……。ガンバラайдだった。

「ガンバラайд」「調子乗るからだ……。」

「ガンバラайд」「それで、水色のは、宏君とミオさんで樹木・・角が折れてるクウガは・・輝君だつたんだ。」

輝「そうだよ！」

宏「よろしく！」

ミオ「俺は、ベルトになるんだ！」

「ガンバラайд」「よろしく！」

その後、いろいろあつて一日は終わった。

仁「輝君……。」

輝「どうしたの？」

仁「実は俺……この世界の人間じゃないんだ。」

輝「ええええええええええええ！」

仁「だからさ、あの時変な質問をしたんだ。」

（回想）

仁「ねえ・・・君、名前何でいいの？あと、ここはどこ？」

輝「僕は空野輝！あと、ここは空ヶ丘にある都立空ヶ丘第一高校だよ。」

輝「それで・・・」

仁「だから、俺を泊めてくれる宿とかないかな？」

輝「だったら家にくればいいよー」

僕は別にいいと思う。

マイペンライは宿としても利用されているんだし。
あ、マイペンライって僕の家のことだよ！
僕の家、喫茶店やってるんだ。

そして、マイペンライ。

輝「おやつさん！今日の夕飯は？」

おやつさん「納豆カレーだよ！」

おやつさんはこの店長である。

そして、僕達は納豆カレーができるまで待っている間、クラヒフォーゼ（クラヒ版）で遊ぶことにした。

仁「ディケイド・ノーマル&フォーゼ・ベースステイツ」VS輝「
クウガ・マイティ&オーズ・タジヤドル

結果・輝の勝ち！

仁「オーズ・紫田」VS輝「クウガ・アルティメット&ディケイド・
ノーマル」

結果・輝の勝ち！

仁「オーズ・タジャドル&オーディン」VS輝「クウガ・マイティ
"ゴウラム"」
結果・仁の勝ち!

そして、納豆カレーができた。

納豆カレーを食べながら、僕と仁君は話をしていた。

今日は、僕と仁君、そしておやつさんしかここにはいない。みんな用事で別の場所にいるんだ。

輝「それで、仁君の世界つていうのは・・?」

仁「俺は、元々こんな感じの世界に俺は住んでいた。怪人もライダーも実物はいなかつたが、ライダーはテレビの中で怪人を倒していたよ・・。」

輝「そうなんだ・・僕の世界も同じように仮面ライダーはテレビの中だけの存在だつたんだけど、急に怪人が現れて、僕はクウガになつたんだ。」

仁「俺は、ガンバラードをしようとしたら、仮面ライダー・ガンバラードつてカードが出てきたんだよ。そしたら、俺は筐体に引きずり込まれて、気づいたら地獄兄弟とオーズに睨まれてて、ピンチになつた際にディケイドとフォーゼからベルトをもらつたんだ。」

輝「いろいろあるんだねえ。」

仁「ま、そういうわけだ。」

そのころ、どこかくらい道で。

ケータイを覗きながら悲しげに歩く男性がいた。

ケータイの画面にはこう書いてある。

鈴木つて「さくね？」

鈴木・ハマ

鈴木つて「さくね？」

鈴木・ラビタン

まち鈴木氏ね

鈴木・がつぽれ大佐

マジアイツ学校くんなー空気が汚れる。

これを見ているのは、この画面に悪口を書かれている鈴木である。

鈴木「何で嫌われるんだろうな・・・。」

「？」「？」「？」「？」「？」

「そこのお前・・・。」

鈴木「何？？怪人？」

そこには、サソリを思わせる人形の怪人がいた。

「？」「？」「？」「？」「？」

「我は、スコーピオン・ゾディアーツ。この悪口を書

いたやつが憎くないか・・・？」

鈴木「憎いよ・・・。」

スコーピオン「なら、このスイッチで無限の力を手にするか・・・？」

「復讐ができるぞ・・・。」

鈴木「欲しい・・・。そのスイッチ欲しい・・・。」

スコーピオン「これは無料でやる。だから、思う存分使え・・・。星
に・・・願いを・・・。」

鈴木はボタンを押す。

すると、熊の姿をしたゾディアーツが現れた。

名を、ベア・ゾディアーツといつ。

スコーピオン「もつ・・・この世界に用はない・・・。」
スコーピオンは別の世界に消えていった。

鳴滝「まさか・・・ガンバラيدの世界といつのは偽りか・・・?
そういうえば、渡がガンバラيدの宇宙の中に世界があるとか言って
いたな・・・まさかその説のほうが正しいのではないか・・。」
鳴滝は、未だにガンバラيدを探し続けている。
白いアストロスイッチカバンを持つて。

次の日。

生徒が校門から逃げ出す。

仁「なんだ?」

生徒「鈴木が・・・鈴木があああああ！」

輝「鈴木君つてまさか・・・！」

生徒「そうだよ！お前のクラスの鈴木だよ！」

仁「鈴木君・・・、あああの子か！つて、ゾディアーツかよ！大
熊座の！」

そして、ベアーは近くにいる生徒・・・つてあれ茜さんだよな！

ソラちゃん！

僕が助けるからー。

だから見てて！

僕の、

「変身！」

クウガステイツ／呼応する魂

クウガ「はあ！とりやあ！」

僕はゾディアーツにパンチしていく。

しかし、ゾディアーツに軽々と投げられてしまう。

クウガ「負ける…もんがあああああああ！」

俺たちは、ダスターをと戦っていた。

仁「せえい！はあ！せいやあああああ！」

宏「フツ！へつ！せい！」

次々とダスターを倒す。

しかし、ホントに戦闘員は弱いなあ。

クウガ「超変身！」

僕はドラゴンフォームに変身した。

そして、近くにあつた木の棒をドラゴンロッドにして立ち向かった。

クウガ「はあ！せい！」

しかし、攻撃はゾディアーツには効かなかつた。

仁「変身！」

「ガンバラード ガ・ン・バ・ガンバ！」

ガンバラード「はああああああああ！」

俺はジャンプし、ゾディアーツにキックを決めようとするが、弾かれる。

ミオ「待たせたね！」

宏「ミオ！行くぜ！変身！」

宏はミオとともに仮面ライダー樹木に変身した。

樹木「さあ！行くぜ！」

「リーフブレード！」

俺はリーフブレードで攻撃する。
しかし、その攻撃も弾かれる。

ガンバラード「大丈夫か・・・？」

クウガ「そつちこそ。」

樹木「なんか手はないのか？」

ガンバラード「何があるはずだ！」

俺は、そう言ひ。

すると、クウガのベルトにあるアマダムが光り出す。

クウガ「なななな何が起こってるんだ？」

それに呼応するかのように、俺のベルトも樹木のベルトも光り出す。
そして、クウガのベルトから光球が現れ、俺のベルトから、真っ黒なスイッチが現れ、樹木のベルトからゼンマイが現れる。
そして、それらが一つになり、一つのスイッチとなつた。
番号の書いてある部分に、クウガの紋章がついた。
ゼンマイを回してスイッチを起動するそつだ。

ガンバラード「さあ！行くぜ！」

「クウガ・オン」

そんな音声がなつた後、クウガの变身音声が鳴り響き、俺の体はマイティフォームのような装甲で覆われ、顔にはクウガの角がついた。

よお！「！これが、クウガマイティか！かつこいいな！」

この声は・・・シノビか？

そうだよ！これならお前も戦える！

分かつた！がんばつてやるぜ！

突然、俺たちの体が黄金に輝いた。

クウガも、樹木も、俺も！

ガンバラード「行くぜ！」

俺は、ゾディアーツをアッパー攻撃する。

そして、飛び上がったゾディアーツにクウガと樹木がダブルキックを放つ。

「クウガ・ゲキレツアタック」

そして、みんなに遅れて、俺はライダー・キックを決める。

ガンバラード「はああああああああああああああああああああああ！」

ゾディアーツの体は、大爆発を起こした。

そして、落下してきた鈴木をキャッチする。

ガンバラード「鈴木……？」

鈴木「。」

鈴木は気を失ったようだ。

クウガ「やつたね！」

樹木「やつたな！」

ガンバラード「ああ。」

その日の授業が終わると校門の前で世界の壁が現れた。
仁「輝、宏。俺はもう行くな。別の世界が待っている。」
輝「うん、分かった。行つておいで。」
宏「またどこかで会おうな。」
仁「じゃあな！」

俺は、別の世界へと消えていった。

しかし、戦いは終わつたわけではなかつた。

あのゾディアーツスイッチにはラストワンが残つていたのだ……。

今回から、紅夜さんの作品「仮面ライダーサタン」、「俺の姉ち
んは・・・」と口アボします！

まず、今回は、「仮面ライダーサタン」から…

破壊された街。

死んでいる人々

「一体なぜ「おも」な」とか

「真相はヤハニ達が知っている」

卷之三

ここは「デーモンリベリオン」の世界。
その物語のパラレルである。

天使の中でも少し偉い「天使・ミカルゲリオ」は、街を部下達に破壊させていた。

みのようだ！」

？？？？？ - ハシ

そこで、ミカレデノオの

ミカルゲリオはそのまま倒れる。

天候遂に驚いて飛んできた。かくはうを見ると、

その戦士の名を「仮面ライダーガンバライド」という。

「二」

俺は、部分に大砲のようなものを装備し、飛び上がる。そして、向かつてきた天使達をこつぱみじんに倒していく。ガンバライド「天使が・・・ごみのようだな！」

ミカルゲリオ「はああああああ！」

ミカルゲリオも襲い掛かってくる。

「ブーメラン・オン」

俺は、×部分にスイッチを差込み、起動させる。足を横に振ると、ブーメランが発射された。

そして、ミカルゲリオの体を裂き、瞬殺した。

ガンバラيد「貴様ら、この程度か・・・。」

そして、また別の場所。

春香「た・・・助けて・・・。」

春香という名の少女は恐るべき天使の前でおびえていた。

天使「死ねええええ！」

駿「待てよ。殺るなら俺を殺れ！」

天使「ならばそつちを・・・！」

駿「行くぜ！スカル！」

スカル「ああ！」

駿「変身！」

駿はスカルの力で仮面ライダー・サタンへと変身を遂げた。サタンは背中の翼で天使に向かっていき、キック攻撃をする。

ガンバラيد「はあ！」

「ガンバラيد・ゲキレツアタック」

俺は遠くにいた敵に向かつてライダー・キックを放つた。

その拍子に、黒い何かを見た。

二人のキックは天子を粉々に潰した。

ガンバラيد「貴様、俺の敵か？」

サタン「お前が天使ならな。」

ガンバラيد「俺は、天使の敵だ。」

サタン「なら仲間だ。協力しろ。」

天使は灰色の壁を出現させ、ライダーを一人出した。

一人はポセイドン、もう一人はオーガだ。

ガンバラード「じゃあ、ここいら倒そつじゃん！」

サタン「ああ、やるか！」

俺たちは立ち向かっていく。

オーガ「お前ら・・・潰す。」

ポセイドン「俺と、戦え！ただし、命乞いはするな。時間の無駄だ。」

「

俺はポセイドンと戦つていてる。

「クウガ・オン」

クウガステイツにチエンジし、ポセイドンの剣を奪つ。そして、力をこめてタイタンフォームになる。

ガンバラード「はあああああああ！せえい！」

「クウガ・ゲキレツアタック」

俺は、ポセイドンを必殺技で倒した。

サタン「はあ！」

オーガ「フツ！」

黒いライダーがぶつかり合つ。

サタン「！」

俺は、強くキック攻撃をした。

すると、オーガは大爆発を起した。

ガンバラード「ここにはもう、用はないな。」

サタン「そうか、なら行けよ。別の場所の平和も守れよ。ここは俺が、守るから。」

ガンバラード「なら、俺の姿がサマになつたらまた来てやる。」

サタン「待つてるぜ。」

俺は、別の世界に消えていった。

この世界で得たのは、拾った天使の羽。

無のエリア／途中経過

鳴滝「そこにいたのか・・・。」

仁「鳴滝さん・・・。」

鳴滝「どこにいたんだ・・・？」

仁「空我の世界と、サタンの世界。」

鳴滝「世界？？エリアではないのか？」

鳴滝は俺の話を聞いて驚く。

「こは、無のエリアである。
また飛ばされたようだ。」

鳴滝「そして、フォームを一つも手に入れたのか・・・。」

仁「うん。まあ一応。シノビとクウガ。」

鳴滝「そうか・・・。途中経過をありがとう。」

仁「それと、ゾーンメモリはなかつたな。」

鳴滝「なかつたのか・・・。ならWの世界に行くことにしてようか。」

仁「ああ、そこならありそうだな。」

俺は、また別の世界に行つた。

そこには道の場所が広がつていた。

そこは荒れ狂っていた。

草木など周りには全く見えず、地割れを起こした跡が良く見える。
この黒い地面に立つ俺が見たのは赤い空、火の海、迫りくる怪人軍
団。

俺が下した判断は一つ。

仁「変身！」

「ガンバラード！！ ガ・ン・バ・ガンバ！」

俺は、仮面ライダー・ガンバラードへと姿を変える。

そして、俺は怪人軍団に立ち向かっていった。

あの怪人軍団は「ユニバースショッカー」

財団？を配下に置き、全宇宙を支配しようとしている極悪な組織で
ある。

ガンバラード「俺は 仮面ライダーだから！決して負けない
！」

「マシンガン・オン」

俺はマシンガンモジュールで戦闘員を打ち倒し、隙をついてエルボ
ーを放つ。
まだまだ敵はいる。

「マシンガン・ゲキレツアタック」

俺は、マシンガンの必殺攻撃を浴びせた。

ガンバラード「チッ！どんだけいるんだよ。こいつらー！」

俺はもうわかつていたのかもしれない。

この戦いは、終わりなき戦いだと。

これは果て無きHEROES大戦の幕開けである。

人違いと未来と明日のパンツ

「映司君、久しぶりだね！」

今度、クスクシエで年越しパーティーするんだけど、映司君もどう？
もし良かつたら、参加してね！」

泉比奈「

映司と呼ばれる一人の青年は一通の手紙を眺めていた。

日本の空港で。

年越しパーティーに参加するため帰国してきたのだ。

映司「比奈ちゃん、久しぶりだなあ。元気にしてるかな～？」
俺はとてもいい気分だった。

比奈ちゃんとまた会えるから。
ずっと会いたかったから帰国してきたんだ。

ここにヤミーがいるみたいだな。

この空港にな。

この俺、アンクは空港の中をうろついていた。

俺（映司）は、不意に懐かしいものを見た。

あれ、アンクじゃないか！

映司「おい、アンク！」

アンク「？」

誰だ？こいつ。

生意気な面しゃがって。

アンク「誰だ？お前。」

映司「アンク、俺だよ。」火野映司“だよ。」

アンク「ふざけるな！お前の事なんか知らない。俺は『ヒーローヤミーを探しに来ただけだ！俺は完全な体を手に入れるからな！』」

映司「そういうのはどうでもいいだろ？あ、そうだ…アイスキヤンディー食べるか？」

アイスが好きならアンクだろ？

アイスが嫌いなら人違いかもしれない。

アンク「遠慮なくもらう」…。

アンクがアイスにかぶりつい「としたその瞬間…。

目の前にライダーのようなヤミーのよつなやつがいることに気が付いた。

？？？？「お前か…仮面ライダー オーズ”火野映司”！！俺と戦え！」

映司「何のために？？」

？？？？「お前は強いようだからな！」

俺は、コアメダルがないため、変身できない。

そして逃げようとしている。

？？？？「おっと、命乞いはするなよ？時間の無駄だ。」

アンク「貴様…オーズだと…？」

映司「なにボケてんだ！ほら！メダルないの？」

アンクなら持つてると思つてた。

アンク「チッ。お前にやるコアはない。だが、俺の使うコアはある、変身。」

「タカ！」

アンクは、メダルスロットの一つ付いたオーズドライバーのようなものを腰に巻き、タカメダルを使ってアンクは変身した。

ホーク「仮面ライダー・ホーク！」

ホーク「はあー！そらあー！せー！」

俺は、ヤミーを殴つていいく。

殴つていぐじとこ、拳に赤いオーラがまとひ。

ホーク「こんなやつもどりつだ？」

「カマキリ！」

俺は、カマキリメダルを左腰のバックルに入れる。

そして、バックルの下のボタンを押す。

すると、腕の部分が黄緑に変化し、鎌のようなものが腕に取りついた。

ホーク「はあああああああー！」

俺は、カマキリソードでヤミーに攻撃する。

しかし、ヤミーも負けていられない様子だ。

自分の右手に持つている剣で攻撃を跳ね飛ばす。

恐ろしい攻撃だ。

俺は痛みで立ち上がりがれないので？と思つぽどの痛みを全身に負つていた。

?????「お前は誰だか知らないが、実力はその程度か？」

ホーク「負けてられつかよ・・・。」

俺（映司）は、あのヤミーの中にメダルが隠されていくことに気がついた。

そして、ライダーに駆け寄つた。

映司「アンク、お前腕伸ばせるだろ？それでのヤミーの体からコアメダルを出して！俺が変身できればかなりの戦力になるはずだからー！」

ホーク「しょうがねえなあ。」

アンクは変身を解き、右腕を元から外した。

そして、ヤミーの腹の中にもぐりこんだ。

アンク「そらあー！受け取れ！」

アンクが飛ばしたメダルはシャチ・ゴリラ・チーターだ。

映司「変身！」

俺は、そのメダルを受け取りオーズドライバーに入れる。そして、オースキヤナーでのメダルをスキヤンする。

「シャチ！ゴリラ！チーター！」

俺は、仮面ライダー オーズ・シャ・ゴリーターヘと変身を遂げた。オーズ「はあああああああ！」

俺は、チーターの高速移動を利用し、空港の壁を駆け抜ける。そして、上空からゴリバゴーンを発射する。

ヤミーは重い攻撃に叩き潰されそうになつた。

ヤミーは反撃しようと、剣に力を込め、衝撃波を繰り出す。そこで、シャチの放水を使って、相手の視界をくらませ、相手の気づかぬうちにチーターで相手の後ろに回つこむ。そして、一発パンチを放つ。

ヤミーは倒れた。

？？？？？「覚えておけ・・・・・。」

ヤミーは消えていった。

映司「アンク！大丈夫か？」

アンク「あああああ・・・・・。」

映司「とりあえず、クスクシエに行こうか。」

海斗「おまえ・・・・・なんだよ！」

仮面ライダー アクアになる者”水渡海斗”の目の前にはあのヤミーが立ちはだかっていた。

？？？？？「俺はポセイドン・・・・・。仮面ライダー ポセイドンだ！」

お前をつぶしに来た！」

海斗「仮面ライダー・・・・・。お前みたいなやつが？ライダーは助け合いでしょ？」

ポセイドン「うるせあいっ！お前の指図は受けない！せつせと変身

しろ！」

海斗「チツ。仕方ねえなあ。変身！」

俺は、変身ポーズを取り、アクアバッカルの力で変身した。
青いスーツに見をまとう水のライダー”仮面ライダーアクア”である。

アクア「仮面ライダーアクア！」

ポセイドン「アクアアアアアアアー貴様を本氣で潰させてもらひつー。」

アクア「やつてみろ！」

ポセイドンとアクアはぶつかり合つて・・・・・。

比奈「映司君！それ、アンク？」

比奈ちゃんは案の定驚いた。

ここは、クスクシエ。

今は知世子さんはいないうだ。

映司「ああ、そなんだ。」

比奈「アンク・・・ここにあるよね？」

比奈ちゃんは割れたタカメダルを見せる。

映司「うん。もしかして、偽者か？」

アンク「なんことあるか！俺はグリードだ！」

「確かにそれはグリードだよ！素晴らしいッ！」

突然、クスクシエのテレビモニターから見たことある人物が映し出される。

鴻上先生だ。

メダルシステムを開発した鴻上ファウティーションの会長だ。

「そのアンクは、君達の知つているアンクたちとは違つ！」

映司「違うんですか・・・？」

「そのアンクは、火野君がオーブドライバーを手にしなかつた世界のアンク君だ。」

映司「ということは、別世界のグリード・・・。」

前に、電王たちと一緒に時を救ったことがあるから」いつの複雑のこととも分かる。

比奈「よく分からぬけど・・・、私の知ってるアンクじゃないってこと・・・？」

映司「うん、そうみたい。」

アンク「でもよ、お前もつぐづぐダサいよな。メダル奪われたりしてよ。」

映司「そつちだつてあのヤマリーにフルボッコにされてたじやないか！」

比奈「もう、やめて！」

比奈ちゃんは、俺たちの耳を強く引っ張つて口喧嘩を止めた。

アンク「俺の世界のやつと同じぐらいの怪力馬鹿だな。」

比奈「その言い方はないでしょお！」

アンク「どうもいつも知らんが・・・。」

アクア「はあ！せえい！」

ポセイドン「全く効かないな・・・。」

アクア「あいつ・・・俺と同じ力を持つてやがる・・・。」

ポセイドン「お前の水の力に似ているだろうな。はあああああああつ！」

アクア「がああああああああああああ！」

俺は弾き飛ばされる。

こんなやつに！

そして、その戦いの様子はクスクシエまで聞えてきた。

映司「！」

アンク「メダルのにおいだな。」

映司「行こう！」

アンク「ああ。」

俺たちは外へと駆け出した。

アクア「お前なんかに負けないいい！」
ポセイドン「あがくのもやめないか？？」

アクア「があああああああ！」
「

俺の体に刺激が走る・・・
もう、俺は終わりなのか・・・？
そう思った瞬間、奇跡は起きた。
二人の人の影が見えたのだ。

映司「あれ・・・仮面ライダー。」

アンク「そんなことはどうだつていいが、とにかくあいつのセルメ

ダル全て奪う！」

映司「行くよ！」

アンク「チツ。」

映司「変身！」

アンク「変身。」

「シャチ！」「リラーチーター！」

「タカ！」

オーズ「はああああああつ！」

ホーク「ふううううううううつ！」

俺たちは変身を遂げた。

ホークは正面突破していく。

そして、ヤミーの腹に腕を突っ込む。

すると、ヤミーのメダルが血のように吹き荒れた。

オーズ「よし！いいメダルが揃つたぞ！」

「タカ！クジヤク！」「ンドル！タージャードル！」

オーズ「はあああつ！」

俺は、ホークに似たような形態「タジヤードルコンボ」に進化を遂げた。

そして、タジヤスピナーにコアメダルを入れる。

「タカ！クジヤク！コンドル！シャチ！ゴリラ！チーター！バッタ
！ギガスキャン！！」

オーズ「はあああああああああつ！」

エネルギーを溜め、赤い光弾を作る。

そして、ポセイドンに向かつて放つ。

「バッタ！」

その隙を狙い、ホークはバッタの力で上空に跳ね上がりキックをか
ます。

アクア「あんなやつらもいるんだな。よし！俺だつて……！」

俺もポセイドンに駆け寄つて、キックやパンチをかます。
その攻撃はポセイドンのどんな防御も貫いていく。

あの弱い攻撃は気の迷いだつたかのように。

そして、決めの一発にパンチを放つた。

するとポセイドンはぶつ飛ばされた。

アクア「俺に勝てると思うなよ！俺は世界を救つたライダーなんだ
からな！」

オーズ「アクア、だつけ？君が必殺技、決めていいよ！」

アクア「分かつたぜ！」

ホーク「そんな赤の他人にいいのか？」

オーズ「だつて、ライダーは助け合いでしょ？」

俺は、力を溜める。

気合が強くなつていぐごとに水色の粒子の輝きが増す。

アクア「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！アクアアアアア
アアアアアアライダアアアアアアアアキイイイイック！」

すさまじくド派手なモーションがポセイドンを驚かせる。

そして、その攻撃があたり、ポセイドンはメダルを散らし、その場
に倒れた。

アクア「まだ粘るか！」

俺は、ポセイドンにもう一度キックを放とうかと思うと。

オーズ「やめて！」

アクア「なぜだ！」

オーズがそれを阻止する。

オーズ「ライダーは助け合いだよ。このライダーにも、優しいところはきっとあるんだよ。アンクにも、アクアにも！だから、暴走が止まつたのなら話そうよ。」

アクア「しようがないなあ。」

俺は、仕方なく、オーズに従うこととした。

映司「ねえ、君大丈夫？」

「？」「大丈夫。」

映司「君、名前何ていうの？」

「？」「僕は湊ミハル。仮面ライダー・ポセイドンだよ。」

映司「どうして暴れたの？」

ミハル「それは・・・。」

僕は、40年後の未来からやってきたんだ。

それにはいろんな話がある。

僕の時代にも怪人はいる。

その怪人に立ち向かうために、僕は鴻上という老人から「ポセイドンライバー」を受け取ったんだ。

そして、ポセイドンに変身し、敵を倒していくんだけど。ある日、時空の穴から無数のコアメダルとセルメダルが僕の体に入つていったんだ。

そのせいで僕の体は暴走し、今にいたるのさ。

アクア「そんな過去があつたのか。悪かつたな。」

ミハル「こつちこそ。」

アクアとミハル君は握手をした。

その握手はとても気持ちのいいものだった。

映司「じゃ、僕はもうそろそろクスクシ工に戻るけど、みんなどう

？」

海斗「俺も行く。」

アンク「まあ、あそこにはアイスがあるから俺も行く。」

みんなは賛同した。

ミハル君を除いて。

映司「ミハル君は？」

ミハル「僕でも・・・いいの？」

映司「もちろん！」

ミハル「じゃあ、僕も！」

そして、大晦日パーティーが開かれた。

鳴滝「そちらにアクアとホークを送つて正解だつた。また大きな絆
が芽生えた・・・。その絆さえあればユニバースショッカーなんて・・・。
」

鳴滝は、影でボツボツとつぶやいていた。

「ここは廃墟。

とても薄暗い。

真っ暗な空。

そして、紅い地面を踏みしめる真っ黒な奴。
ゾンビである。

凰牙「お前ら、待つてたぜ。」

ゾンビは彼に飛び掛る。

凰牙「変身。」

凰牙は仮面ライダーブレイクへと変身をする。
しかし、君達が前に見たときとは姿が違うだろう。
なんせ黒いマントと長い剣を装備しているのだから。

ブレイク「お前ら、潰す。
ブレイクは剣を一振りする。

すると、ゾンビは灰になつて消え去る。
しかし、ゾンビはまだ山のよじこころる。

ブレイク「チツ・・。今日に限つて何なんだよ！」

いつもは十数ぢよつとなのに、今回は見渡す限り全てゾンビだ。

今日は、寝られないかもな。

駿「なんなんだ？このゾンビたちは？」

スカル「知らないが、悪魔の仲間ではないな。」

駿「なら・・・・・倒すまでだ。変身。」

駿は紋章の力で、仮面ライダーサタンに変身した。

真っ黒なボディに包まれたその姿は独特のオーラを放つ。
そして、サタンはゾンビに飛び掛る。

すると、面白いほどに潰されていく。

サタン「次々と潰れりや。」

ブレイク「はあ！」

俺は、剣でゾンビを切りかかる。

簡単に潰れるゾンビだが、この数なら巨大なモンスターと変わらんのだ。

ブレイク「ちくしょあ！ブレイカー・バースト！」

俺は、衝撃波を放つ。

すると、ゾンビはぶつ飛ばされ、壁にぶち当たり、ある者はそれさえも突き抜ける。

サタン「なんだ？アイツ。」

ブレイク「誰だ？」

二人はお互いに駆け寄つた。

サタン「お前、面白そうじゃねえか。」

ブレイク「そつちだつてよ。」

サタン「なあ、俺と一緒にやらねえか？」

ブレイク「面白そうだな！」

二人は、ゾンビを蹴散らしていく。

すると、どんどんゾンビが消えていく。その中に、ピンク色に輝く何かがいた。

ディケイド「この世界は誰の世界だ？」

アイツは・・・誰だ？

二人は疑問に思つた。

ディケイド「俺は仮面ライダー、お前らを連れに来た。」

サタン「なんのために？」

ディケイド「世界はユースショッカーに破壊されようとしてい

る。ゾンビがこんなにいるのもそれが原因だ。世界の崩壊を止めるために協力してくれないか？」

そんな内容だった。

俺たちは闇の戦士だ。

しかし、悪ではない正義なのだ。

ブレイク「俺達は正義の闇だ。行かせてもらおう。」

サタン「俺もだ。」

ディケイド「じゃあ、行こうか！世界の崩壊を止めるために！」

3人は別世界へと消えていった。

迫り来るロノ巡り合戦

「ここは風都。

さわやかな風が吹く工口都市である。

そんな風都の上空で一人のライダーが羽ばたいていた。

「仮面ライダー翼」である。

翼「どこまで来るんだよ！この鳥が！」

俺の後ろには、バード・ドーパントがいた。

バード「はああ！」

翼「チツ！もうどうなつても知らないからなー！」

「翼・マキシマムドライブ」

翼「はああああああああああああああ！」

バード「グワアアアアア！」

バード・ドーパントは落下していき、大爆発を起こした。

翼「チヨロいもんさあ。」

翼「まだいやがるのか！」

地上で俺は戦っていた。

相手はスイーツ・ドーパント、マグマ・ドーパント、コックローチ・ドーパントだ。

翼「これでどうだ？」

「ELEMENT」

俺は、ELEMENTフォームに進化し、ドーパント達を一掃した。

翼「ま、こんなもんかな。」

ドゴオオオオオオン！

突然そんな音がした。

あの音は、商店街のほうからだ。

行ってみることにしよう。

その頃、未来の世界で。

照井亮は存在していた。

ああ
「！」

飛鳥「そんなに嬉しかつたの？」

俺は、幼馴染の飛鳥と仮面ライダ

亮一 だつてよ、俺の憧れだぜ！」

飛鳥
よか
たし
や
なし

歩いていた地面に急に紫色の穴が開き、そこに向かって落ちていったからだ。

飛鳥 一 ちよ ・ ・ 亮！亮！

俺は、変身を解いて走っていた。

そうそう、いい忘れてたな。

俺の名は赤沢ヒロシカ

僕は、イタリ翼に変更する大学生だ!!

あの後、俺の相棒のスカイは抜け殻の翼メモリを俺に託し、自分の世界に戻つていった。

そんな俺は、帰宅しようつと歩いていた。

繩子、セイジ

ヒュウガ「ねえ、君大丈夫？ねえ、大丈夫？」

その子は田を覗ましたよ'うだ。

ヒュウガ「大丈夫……？」

亮「うん……ありがと。」

その子は、俺が嫌いなのがどうか知らないが、離れていった。

俺は、それをただ呆然と見つめていると、自分の後ろにあいつがいた。

ヒュウガ「ドーパントか。」

そう、奴はナスカ・ドーパント。

なかなか強い奴だ。

どうして分かるかって？

ミュージアムのドライバーつけてて、赤色だからな。

ナスカ「翼、お前を瞬殺する。」

ヒュウガ「やつてみろよー変身ー！」

「翼

俺は、仮面ライダー翼になった。

亮「あの人、仮面ライダーなのか？それなら……。」

「アクセル」

亮はアクセルに変身する。

アクセル「振り切るぜッ！」

翼「なんだ、アイツ。」

アクセル「はあ！せい！とりやあ！」

ナスカ「ぐ・・・ぐはあああああああー！」

ナスカは一気に弱りはてる。

そして、

「アクセル マキシマムドライブ」

アクセル「決めるぜ！」

ナスカ・ドーパントはメモリブレイクされた。

翼「君、誰？」

アクセル「俺、照井亮！2代目のアクセルさ！」
変身解除したアクセルの姿は、あの少年だった。
俺も変身解除し、さつきの爆音の場所まで行くことにした。

その商店街での爆発跡はまるで落した隕石のようだった。
それを俺たちが立っていると、そこに青年が話し掛けてきた。
その青年は黒いハットをかぶつており、どこかマヌケとも感じられる。

名を「左翔太郎」という。

翔太郎「今、世界が大変なんだ。ユーバースショッカーによつて世界が滅ぼされようとしているんだ。一緒に来てくれるか？お前らの力が必要なんだ。」

ヒュウガ「もちろんだ！」

亮「俺も。」

俺たち三人は、世界の壁越えて、消えていった。

フィリップは・・・地球の本棚で興味あること検索中・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8544x/>

KAMEN RIDER GANBARIDE-CLIMAX HEROES-

2011年12月31日18時51分発行